琉球大学学術リポジトリ

児童の関係づくりの支援の工夫
―自他理解や「勇気づけ」を通して―

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2022-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 網敷, 藤代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017955

児童の関係づくりの支援の工夫
―自他理解や「勇気づけ」を通して―

網敷　藤代

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・南城市立船越小学校

1.　テーマ設定の理由

沖縄県の教育の現状は，不登校，いじめ，暴力行為等が 2019 年に過去最多（文部科学省 2020）となっており，筆者の勤務校でも同様の問題行動がみられている。生徒指導部会やケース会議等で話し合いを行うが改善はなかなか難しい状況にある。その原因としては，社会的問題や家庭環境，児童の社会性が未発達，対人関係がうまく結べない，教師の側の働きかけが十分でない等が考えられる。

筆者の実践を振り返ると，児童のトラブルがあったときトラブルを解決することを優先し，子どもの気持ちに充分寄り添っていなかったように思う。大事なのはその子の気持ちを聞き，どうしたいのか一緒に考えることのように思う。そして，家庭背景も考慮しながら相手の気持ちを共有し，子どもが悲しいときは一緒に悲しみ，子どもが嬉しいときは一緒に喜び，一緒に考えたいと思う。それが子どもに寄り添うことだと考える。筆者は教師として「自分も相手も大切にできる子」を育てる事を目指したい。

相手を大切にできないから攻撃し傷つける。自分を大切にできないから自己疎外する。自分も相手も大切にできれば，お互いが折り合いをつけ，少しずつ歩み寄り，人と人がつながり，児童の関係もより良くなる事ができるのではないかと考える。

子どもはそれぞれの家庭環境の中で育ち多様な考えを持っている。その子たちが協調性を持ち共に行動するにはどうしたら良いだろうか。國分（2018）は「あるがままの自分に気づき，他者にオープンにする。それを受けて他者も自分の内界をオープンにする。そしてお互いの世界を共有する。この心的状況を『ふれあい』または『エンカウンター』という。このエンカウンター体験が自他発見をさらに促進する」と述べている。お互いを知ることで距離が縮まりつながりができてくるので，自他理解の時間を授業の中に計画的に取り入れ，自分も相手も大切にしようとする気持ちを育てていきたい。また、野田（2017）は「健康に，建設的に暮らしていこうというときに，絶対必要な要素は『勇気』だ。それは『元気』といってもいいし，『生気』といってもいい」と示し，筆者も子どもに「勇気づけ」で接し，元気づける事を大事にしたい。

以上のことから「勇気づけ」による働きかけを行いながら，構成的グループエンカウンターで他者理解や自己理解，リレーション（ふれあい）づくりを意識した取組等をすることで，児童の関係づくりの支援を行っていきたいと考える。そして，他者と協同して課題を解決できるような児童の育成と学級環境の改善を図りたいと考え本テーマを設定した。

2.　研究の目的

学級で児童に寄り添い，自他理解を意識した授業作りや，児童理解をもとに「勇気づけ」を行うことで，児童のよりよい関係づくりの変容を検証することを目的とする。

3.　研究内容

(1) 人間関係形成

『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　特別活動編』には，「『人間関係形成』に必要な資質・能力は集団の中において，個人と個人あるいは個人と集団という関係性の中で育まれると考えられる。年齢や性別といった属性，考え方や関心，意見の違い等を理解した上で認め合い，互いのよさを生かすような関係を作る事が大切である。」とあり（文部科学省　2018），筆者も人間関係形成をそのように捉える。

(2) 自他理解とアレンジしたエンカウンター

片野（2009）は、自己理解は「他者が知っている自分自身に気づくこと」，他者理解にとって必要な事は「他者を理解しようという，他者に対して無条件の積極的関心を示す反応や理解的態度である。」と述べている。また，國分（2018）は「構成的グループエンカウンター（以下，「SGE」）は本音と本音の交流をすることによって，自己疎外からの脱却をねらうものであり，自分の原点に戻るのを援助するグループ体験であり，その本質の第一は，自己発見と他者理解にいたる事，第二は，感情の変容，第三は，新しい行動を身につける事である。」と述べている。さらに「SGE の文化（風土）は，非審判的・許容的雰囲気であるが，これはロジャーズ理論の『受容』という概念に負っている。」と述べている。このことから筆者は，自分の思った事，感じた事の本音を語りあい，お互いを知り合うことでリレーションができ，安心感が生まれる。そして，安心感が人間関係につながると考える。SGE にソーシャルスキルトレーニングやアサーショントレーニングも含まれるため必要に応じて指導し，学級の実態に合わせてアレンジした SGE で自他理解を深めていきたい。

(3) 「勇気づけ」と児童理解

「勇気づけ」とは，アドラー心理学で対人支援における理論・技法のことで，自分自身や他者に「困難を克服する活力を与えること」である。野田（2017）は「不適切な行動の根本原因は勇気を失っていることだ。だから，勇気づけなければならない」と言っている。筆者は「勇気づけ」の言葉（貢献に注目・過程を重視・成果を指摘・失敗を受け入れ・成長を重視・判断を委ね・肯定的に表現・私メッセージ・意見言葉・感謝と共感）を取り入れ，子どもを変えるのではなく，大人が子どもへの対応の仕方を見直し「好ましい行動を認める」ことに目を向け，日々の児童の行動を肯定的に捉え支援にあたりたい。それにより児童と教師の関係作りにつなげたい。横川（2009）は「その人の持っている世界を認めるところから出発する。」「自分の思いを言語化することで，きれたり爆発したりしなくてもすむようになる。」と述べている。学校でも一人一人の児童理解に努め，弱さも認め受け入れ大切にすることが今後ますます必要となり求められていくと考える。個々の児童の理解を行ったうえで，児童に合わせた「勇気づけ」を行っていきたい。

4. 研究方法

(1) 授業実践（SGE の学級活動）を行う事により，児童の関係に意識の変容がみられたかを，授業観察と児童の振り返りシート，アンケート（事前・事後）により分析する。

(2) 教師が「勇気づけ」を行うことにより，気になる児童（A児）の行動にどのような変容がみられたかを行動観察シートにまとめ分析する。

5. 研究の実際（課題発見実習：A 小学校４年生　２クラス 71 人　令和３年９月６日～９月 17 日）

４年１組と２組において各４時間，学級活動（SGE）を行った。事前アンケートで「あなたは自分にはよいところがあると思いますか」の問いに「思う」と答えた児童は 27.1％と低かったため，自己肯定感を高める内容の学習に焦点をあて授業を行った。また，自他理解を深めるため，毎時間，授業の振り返りにシェアリング（分かち合い）を行い児童の思いや気づきを交流する場を設けた。

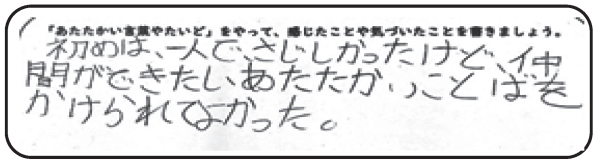
(1) 授業実践

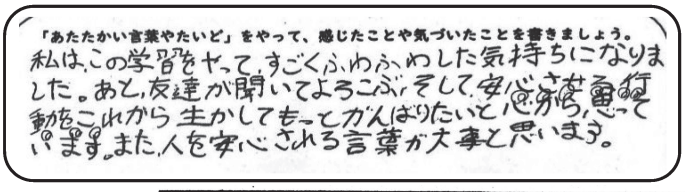
① 題材名「 言葉や態度で思いやりの気持ちをあらわそう」

② 本時の展開（３／４時）

過程		主な学習活動	教師の留意点・準備・【評価】
つかむ 15分	インストラクション	1　先週を振り返り，本時のめあてを知る。 めあて：思いやりのある言葉や態度について考えよう。 2　温かい（ふわふわ）言葉や冷たい（チクチク）言葉を言われると，どんな気持ちになるか考える。	・休み時間にファイル「なかよし」を配布し，振り返りやすくする。 □めあてと言葉を掲示し確認する。 □人間のイラストを２枚掲示し，表情の違いを視覚化する。
体験する 20分	エクササイズ	3　「セイムカラーゲーム」をする。 ○次は，思いやりのある態度について考える。 ◎ルールを説明しシールを貼ってゲームをスタートする。 ○なぜもう一度，ゲームをやりたいか理由を考える。 ◎２回戦は白を２枚入れてゲームをスタートする。 ○白シールの友達は，どんな気持ちだったか考える。 ○ゲームだけでなく私達の周りには困っている人がいる事を知る。（身体の不自由な人・計算が苦手・字を書くのが苦手等） ○人は得意な事，苦手な事がある。努力不足ではなく，頑張ってもできずに困っている人がいる事を知る。	□ルールを掲示する。 □シール（赤，青，黄，緑，白）を貼る。 ・タイムを計り，意欲を高める。 ・友達に教えてあげた子を皆に紹介し，思いやりのある態度について考えさせる。 ・ゲームが楽しかった理由を考えさせる。 ・多数派の友達に，少数派の人の気持ちを考えさせる。 ・少数派の友達の気持ちに気づかせる。
振返 10分	シェアリング	4　今日の学習を振り返る。 ○今の気持ち(感じた事や気づいた事)をグループの友だちと伝え合う。 ○自分の思ったことや気づいたことを振り返り，用紙に書き発表する。	【評価】言葉かけや態度で心や体の状態が変わる事を知り，思いやりのある言葉かけや態度の大切さを知る事ができたか。

SGE の「ふわふわ言葉とチクチク言葉」をアレンジし，言葉の学習後，思いやりのある態度について考える「セイムカラーゲーム」（無言で同色のグループに分かれるゲーム）を行った。１回目は４色，２回目は４色に白を２枚加え，少数派の気持ちも考えさせるようにした。少数派や周りの児童は言葉や行動で相手の気持ちが変わることを体験し，以下のような感想を持った。課題発見実習後、担任から子ども達が仲よく落ち着いてきたと話があった。


「あたたかい言葉やたいど」をやって、感じたことや気づいたことを書きましょう。
初めは、一人で、さびしかったけど、仲間ができたいあたたかいことばをかけられてよかった。


「あたたかい言葉やたいど」をやって、感じたことや気づいたことを書きましょう。
私は、この学習をやって、すごくふわふわした気持ちになりました。あと、友達が聞いてよろこぶ、そして安心させる行動をこれから生かしてもっとがんばりたいと思ったから、思っています。また、人を安心される言葉が大事と思います。

(2) 授業実践からの考察

① アンケート結果より

検証授業の事前と事後に行ったアンケート結果は図１・図２の通りである。「あなたは，自分にはよいところがあると思いますか。」の問いに対し，「思う・どちらかといえば思う」と肯定的に答えた児童は，事前 69.5%に対し，事後 84.5%と 15 ポイント増えていた。「クラスの中に，あなたの気持ちをわかってくれる人はいると思いますか。」の問いに対し，「思う・どちらかといえば思う」と肯定的に答えた児童は，事前 74.5%に対し，事後 84.5%と 10 ポイント増えていた。また，「相手の話を聞く事は好き」と答えた児童も増えたが，「自分の意見を言うことは好き」と答えた児童は，授業の前後で殆ど変化がみられなかった。このことから「友達や自分のよいところ」をみつけ，「思いやりのある言葉や態度」について考える学級活動を行い自分の思った事や気付いたことをお互いに伝え合うことにより自他理解が深まり友達とのリレーション作りにつながり認知の修正が行われつつあるが自分の思いを表現する工夫が必要な事が課題に挙げられる。

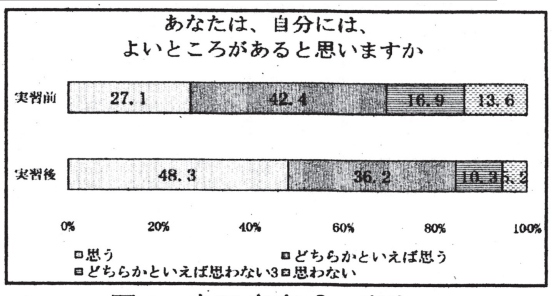


図１　自己肯定感の変容

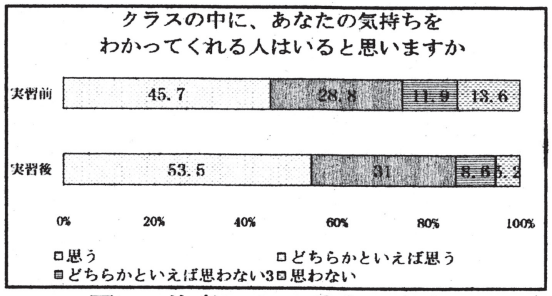


図２　他者による受容の変容

②　気になる児童Ａについて

気になる児童Ａについて，事前に学級担任から家庭環境や学校での友達との様子を聞いた。学級全体の児童支援をしながら，Ａ児を行動観察し「勇気づけ」を意識して働きかけるようにした。その際「行動観察シート」を用い「子どもの行動－先生の行動－子どもの反応」を見取るようにした。

表１　行動観察シート

状況・場面	児童Ａの行動	先生（筆者）の行動	児童Ａの反応
１日目・自己紹介	教室の後ろに立ちゲームに参加しない。	一緒にしようと声をかけた。筆者に警戒しているようなのでしばらく距離をとって観察した。	表情なく首を横に振った。
２日目・休み時間	級友と腕相撲をしていた。	勝負しようと声をかけた。まだ警戒しているようだ。	横を向いて離れて行ってしまった。
５日目・音楽の時間	音楽室に移動せず教室に残っていた。	①どうしたのと尋ねた。 ②Ａ君とここにいようかな，音楽苦手なのと話した。始めてのＡ君からの声かけにつながりを感じ嬉しかった。	①俺，音楽はいつもだよ。先生はどうするかとＡ君から話しかけてきた。 ②俺の父ちゃんも音楽苦手と言ってたと答えた。
７日目・２～４校時	落ち着かない様子だった。	①昨日の国語で書いた５ページの自作の物語を見せてと話しかけた。 ②細やかな様子が描かれ、想像力の豊かさを褒めた。	①机の中から出して見せてくれた。 ②少し嬉しそうにした。
９日目・音楽の時間	担任の声かけで、授業開始から行く準備をした。	「お、始めから音楽に行くんだね、えらい。」と声をかけた。	少し嬉しそうにして音楽室に移動した。
10日目・国語の時間	始業のチャイムがなっても廊下にいた。	①どうしたのと尋ねた。 ②今日から面白い単元に入る事，授業に戻るのは良い事で怒られないことを話した。応答の関係が嬉しかった。	①担任の先生が怒っていると答えた。 ②席に着き，最後まで静かに授業を受けた。

行動観察をまとめると，Ａ児は苦手な科目や難しいと思う授業は離席し見知らぬ人が来ると教室から出て行くなどの様子が見られた。その際，筆者は出来ないことを追求するのではなく出来たことやがんばったことを認め，困っている時は支援するよう心がけたことがプラスのストロークとしてＡ児に伝わったように思う。そのことでＡ児の気持ちと行動に変容がみられ，始め警戒していた関係から筆者と応答出来る関係になったと考える。丹野（2018）は「本当の友達に出会う旅，それを応援するのが大人の仕事だ」と言っており，親しい友だちがいることで安心して学校生活を送ることができると考える。応答関係から友だち作りにつなげていきたい。

6.　今後の研究

課題発見実習において，児童の他者理解・自己理解・リレーションづくりを意識した学級活動の授業を行った。授業後，児童から「思いやりの言葉や態度で，あんまりしゃべらない友だちとももっと仲良くなると思いました。」「セイムカラーゲームで，絆が深まったと思います。身振りや態度だけで気持ちが相手に伝わるんだなあと分かりました。」と振り返りがあった。またアンケート結果やＡ児の変容が見られたことから，自他理解や「勇気づけ」等の取り組みは，児童の関係づくりにおいて一応の成果がみられたと捉える。そこで，来年度もリレーションづくりを意識した取り組みを継続しながら，子どもが自分の思いを表現する事に抵抗が少なくなるよう工夫し，児童のよりよい関係づくりを支援していきたいと考える。

引用文献

片野智治，2009，『教師のためのエンカウンター入門』図書文化.
國分康孝他，2018，『構成的グループエンカウンターの理論と方法』図書文化.
文部科学省，2018，『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　特別活動編』東洋館出版社.
文部科学省，2021，「令和２年度　児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」（2021 年 12 月 20 日取得，https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf）.
野田俊介，2017，『勇気づけの方法』創元社.
丹野清彦，2018，『子どもの願い～いじめ vs12 の哲学』高文研.
横川和夫，2009，『降りていく生き方』太郎次郎社エディタス.